

教育支援・教育協働カリキュラムに関する訪問調査

訪問者： 腰越 滋（教育学講座）

1. 訪問先：

米澤 利明 先生（金沢学院大学 文学部 教育学科 教授 学科長補佐）

2. 日時：

2019年12月12日(木)16時～17時半

3. 頂いた資料など

* 『金沢学院大学 キャンパスガイド 2020』

* 「（参考）設置の趣旨：(ケ)地域協働と組織マネジメントと(コ)インクルーシブ教育」

(ケ)としては、「『チーム学校』と学校組織マネジメント」、「地域協働と教育資源活用」、「地域教育事情研究」、「教師のキャリアデザイン」、「スクールソーシャルワーク論」の5科目が該当。

(コ)としては、「インクルーシブ教育概論」、「教育相談」、「障がい児保育」、「障がい児教育」、「インクルーシブ教育における造形指導」の5科目が該当。

* 講義 “「チーム学校」と組織マネジメント” のシラバス

* 講義 “地域協働と教育資源活用” のシラバス

* 講義 “地域教育事情研究” のシラバス

* 講義 “教師のキャリアデザイン” のシラバス

* 講義 “スクールソーシャルワーク論” のシラバス

* 講義 “インクルーシブ教育概論” のシラバス

* 講義 “障がい児教育” のシラバス

* 講義 “社会的養護” のシラバス

* 講義 “相談援助” のシラバス

4. 聞き取り調査の概要

4.1.教育支援職の養成の意図や今後の計画。学内議論やその内容。

2018年度4月に教育学科が新設されたばかりということもあり、ソーシャルワーカーに関する科目の開講は、2020年度から始まる予定で、3年次からの学生が2020年4月より履修可能な状況にあるというのが現状。ただ後発の強みということもあり、文科省の設置審議会の審査に耐えうる教育課程を構想し順々に科目申請を行い、充実したカリキュラムが整えられつつある。

4.2.教育支援職への志望、就職実績の現状

教育学科の場合、小学校・中学校教諭専攻と幼稚園教諭・保育士専攻の2専攻から成り

立っている。当学科は教員養成が主となっており、学生の進路としては、まずは以下の3パターンの進路などが想定される。

- i. 小学校教諭一種免許状、中学校教諭一種免許状(英語)を取得し、英語力のある小学校教員になる。
- ii. 幼稚園教諭一種免許状、小学校教諭一種免許状、中学校教諭一種免許状(英語)を取得し、幼小連携に強い小学校教員になる。
- iii. 保育士、幼稚園教諭一種免許状を取得し、認定こども園に対応する保育士になる。

したがって教育支援職に関しては、まず2年度後の教育学科の最初のOB・OGの教員就職の実績をみて、その後徐々に、学生の志望に応じて対応し、実績が整えられていくものと思料する。

4.3.教育支援職養成におけるカリキュラム編成(現状・今後の意見として)の留意点

教育学科がスタートして2年度目のため、2年次科目としては教育支援職養成に関連する科目として4科目ほどの開設に留まる。だが、3年次以降には関連科目が開設される見込み(下表参照)。

		2年次	3年次	4年次
専 門 科 目	(ケ)地域協働と組織マネジメント	「『チーム学校』と学校組織マネジメント」	「地域協働と教育資源活用」 「地域教育事情研究」 「スクールソーシャルワーク論」	「教師のキャリアデザイン」
	(コ)インクルーシブ教育	「インクルーシブ教育概論」 「教育相談」 「障がい児教育」	「障がい児保育」	「インクルーシブ教育における造形指導」

4.4.教育支援職養成における教育方法に関する特徴的な取り組み(現状・今後の意見として)や、可能性と課題

現状では、教員養成が主で教育支援職養成を直接行っているわけではない。だが、2019年度開設の「『チーム学校』と学校組織マネジメント」では、シラバスには「チーム学校」や「組織マネジメント」というキーワードはもとより、「カリキュラム・マネジメント」、「連携」、「協働」などのワードが散見され、教育支援・教育協働の概念が十分に意識されたカリキュラム・デザインになっていることが窺われる。

担当教員の米澤先生によれば、協働を前提としたグループワークや討論を頻繁に行っておられるとの由で、コース中の受講学生たちによる熱心なグループワークでの成果物も、閲覧させて頂いた。

課題としては、受講学生たちが、ともすれば教育という「^{シヤン}界」のみに自閉して「学校」を議

論しがちになることである。ここに他の「界」からの視点を加えて、「学校を俯瞰するような視点で捉えることが、今後は必要とされよう。というのは、その俯瞰の視点こそが、学校組織マネジメントの本質の理解には不可欠と思料されるからである。

4.5.教育支援職養成における教育単科大学、教育学部への要望

要望というより、開設2年度目であることが、却って後発効果のようなものに繋がっているのではないか。先発の教員養成の大学群は、既存の制度枠組みの残滓に苦しめられることもあるが、当学科は後発であるが故にそうしたしがらみはなく、他大学の抱える事情から多くを学んだ上で、課程認定申請などを行えるというメリットはあるだろう。

4.6.教員養成カリキュラム編成における、「チーム学校」時代の教員の資質能力育成に対する取り組みの現状

2020年度以降に開設される科目群を、学生が履修して卒業するまでは、取り組みの成果の厳密な成否は問えないが、2019年度開設で2年次履修の「『チーム学校』と学校組織マネジメント」が、「チーム学校」時代の教員の資質能力育成にも大きく貢献しているものと思料される。

4.7.教員養成カリキュラムにおける、教育方法に関する特徴的な取り組みや、可能性と課題に関して

英語力のある小学校教員(4.2.を参照)を養成できる点が、当学科の1つの特徴であり、強みと言えるだろう。頂いた『金沢学院大学 キャンパスガイド 2020』(74頁)にも、他の大学にはない特色あるカリキュラム構成として、「グローバル人材の育成」科目群が用意され(*ibid.*,76頁)、グローバル時代の教師と保育者に求められる5つの力として、Ⅰ.国際人として必要な力、Ⅱ.英語を指導する力、Ⅲ.ICTを活用する力、Ⅳ.共に学び合う力、Ⅴ.マネジメントする力、が掲げられている。

これら5つの力を育成すべくカリキュラムが構成されており、最終的には「グローバル人材の育成」という幹に収斂するような構造となっている。

[参照] <https://www.kanazawa-gu.ac.jp/faculty/education> ; last access 2020.1.13

4.8.教員養成カリキュラムの検討に関しての、教育単科大学、教育学部への要望 4.5.に同じ。

5. 聞き取り調査を終えての印象—まとめに代えて—

米澤先生の謙虚なお人柄もあり、そのお話の中から、新設の金沢学院大学・教育学科が第一期の卒業生を輩出すべく、教育・研究スタッフが鋭意努力している途上にあることが伝わってきた。米澤先生のお話の最中でも、「5つの力」のお話が何度か出てきたが、特に「マネジメントする力」の中核科目たる「『チーム学校』と学校組織マネジメント」は、当学科が教育支援・教育協働を推進する上での中心的な位置づけになっているように感じられた。

「マネジメントには、組織を俯瞰する力が必要で、学校を外側から見る視点、いわば社会

学的なパースペクティブが求められます」とのお話は示唆に富んでいた。米澤先生ご自身は、中学校校長を歴任された後、大学人に転身されたご経歴でもあり、学校現場を知悉されている。そうした教育現場の最前線での数多くのご経験を踏まえた上でのお話であったため、そのお話はより含蓄を以て伝わってきた。「最も多忙で携帯電話を手放せなかった副校長・校長時代からみると、大学人となった今は、対岸の火事を見るような気持ちにさせられることもあり、複雑な思いになることもある」と、謙虚に先生が語られた時、セルフ・モニタリングが出来ている方なのだなと実感した。

もしかすると、チーム学校を推進するには、ステイクホルダーたちの立場を忖度し、自らをセルフ・モニタリングする能力が不可欠なのではないか。その意味では、将来の教育者は、学校という教育現場の最前線に身を置きながらも、自らの教育現場を俯瞰するような視点も、求められるのかもしれない。ただしそれは、他人事のようにみるということではなく、相対化の中で冷静な視点を担保しながら、連携や協働を進めていくということなのであろう。

2022年には第一期の卒業生を輩出される金沢学院大学・文学部・教育学科の取り組みに注目し、2年度後に再度聞き取りに伺いたいと感じた次第である。